

堀
辰雄

雪の上の足跡



雪の上の足跡

高原の古駅における、二月の夕方の対話

主 やあ、どこへ行ったかと思ったら、雪だらけにな
って帰って来たね。

学生 林の中を歩いて来ました。雑木林の中なぞはず
いぶん雪が深いのですね。どうかすると、腰のあたりま
で雪の中に埋まってしまいます。けだもの 獣の足跡が一めん
についているので、そんな上なら大丈夫かとおもって、足
を踏みこむと、その下が藪やぶになっていたりして、飛んだ
目に逢ったりしました。

主 君と、兎うさぎなんぞが一しよになるものかね。それに、もういくぶん春めいて来ているから、凍雪しみゆきもゆるんで来ているのだろう。だが、そうやって雪の中が歩いてきたら、さぞ好い気もちだろうなあ。

学生 ええ、実に愉快でした。歩きながら、立原道造たちほらみちぞうさんの詩にも、こうやって林の中をひとり歩きながら、深い雪の底に夏の日に咲いていた花がそのまま隠れているような気がしたり、蝶ちょうの飛んでいる幻を見たりするような詩があったのを思い出しました。

主 立原は、僕がはじめてここで冬を越したとき、二

月になってからやって来た。あいにく僕が病気で寝こんでいたので、君のように、ひとりで林の中を雪だらけになって歩いて帰って来たっけ。そのときの詩だろう。もう七八年前になるかなあ。……どうだい、きつね狐のやつの足跡はついていなかっただかい？

学生 狐の足跡はどうも分かりませんでした。どんなんだか、まだそれもよくは……。

主 そうだな、こう、まっすぐに、一本の点線を雪のおもて面にすうっと描いたような具合に、林のへりなぞをよく縫い歩いているのだがね。兎のやつのは、そこいら中

を無茶苦茶に跳とびまわると見え、足跡も一めんに入りみだれているが、狐のやつのは、いつもこう一すじにすうつとついている。そしてそのまま林の奥にほそぼそと消えていたり、どうかすると思いがけず農家の背戸せどのあたりまで近づいて来ていたりする。

学生 狐なぞがまだこのへんにうろついているのでしようかしら？

主 いるらしい。このごろは冬になると、僕はからきし意気いくじ地じがなくなつて、ちつとも雪の中を歩かないが、二三年前にはそんな足跡をいくつも見たことがある。し

かし、いたって、もうたかの知れたもんだ。せいぜい農家の鶏を盗りにくるくらいなものだろう。

学生　いつだかお書きになっていた、昔、武家に切り殺された、この宿しゆくの遊女の墓に夜ごとに訪れてくる老狐の話——なんでもその墓にひとりでひび罅が入って、ちようど刀傷のように痛いたしく見えた、その傷のあたりをその狐が舐なめてやっていたとかいう話でしたね。——あれはこの村の話なのですか？

主　この村ではないが、隣りの村の古老にきいた話だ。ハアンでも好んで書きそうな話だ。ああいう話が残って

いたら、もつと聞きたいものだが、あまりないようだね。どうもこういう古駅には一たいに昔話なぞが少ないのではないかね。維新前までは茶屋旅籠はたごがたてこみ、脇本陣わきほんじんだけでも遊女が百人からいたという、名高い宿しゆくのあとだもの。その日その日にちがった話を諸国の旅びとから聞くのに追われて、山奥なぞのつれづれな炬ばたで人にときどきふと思ひ出されてはようやく忘却から蘇よみがえらされて来たような、そういう昔話の残っていないのも当然だろうじゃあないか。

学生　　そうかも知れませぬ。しかし、まだ二つや三

つはそんな話もありそうな気がしますね。

主　そう、ありそうな気もする。ところが、ありそうでないんだ。なんにもないくせに、そんな雰囲気だけもっている——そこがまあ現在のこの村の一種の持味で、僕なんぞにはかえってびったりしているのだろうと思う。こんなに荒廃して、それがそれなりになんとなく錆さびて落ち着いてきている、そんなところからそういう一種の味が出ているのだろうね。だから、つまらないことまで、妙に生き生きとして感ぜられて来ることもある。僕がはじめてこの村に来た当時のことだが、ある日、昔

の屋敷跡らしい大きな石崖いしがけのうえに立って、秋らしい日ざしを浴びながら、病みあがりらしくぼんやりたてしなやま蓼科山の方をながめていた。その晩、宿の主人がいうのに、そのときそうやって石崖のうえに立っていた僕の姿を遠くから見かけて、ふと子供のと看に見た一匹の傷ついた鹿しかのことを思い出したそうだ。なんでも霜のひどく下りた朝のことで、山のほうから追われて来たらしいその鹿は、ちようどその石崖のところまで来ると、ちよいと背後をふりむいてから、そこをすうっと跳びおりて、下の畠のなかを湯川ゆがわのほうへ一散に逃げていった。そうしてその

畠の真白な霜の上には、その鹿の傷ついた足の血が鮮やかに残っていたという話だ。……そんなことをきいてから、その石崖にかぎらず、この村のあちこちに残っている石崖のひとつひとつが、僕にはなんとなく意味ありげに思われて来てならなかった。まあ、そういった鹿の跳び越えていった石垣だとか、秋になると蔦つたかずらが真紅になったまま捲まきついている、何か凄惨せいさんな感じの、遊女らしい小さな墓だとか、——そういうものなら、そのほかに、まだまだ何かありそうだね、これという話らしい話がそれに伴っていなくとも。

学生 三好さんの詩にも、どこかの山村を、一匹の傷ついた鹿が足を縛られたまま、猟師にかつがれてゆく詩がありますね。あれはどこかしら？

主 伊豆の湯ヶ島あたりの風景だろう。僕は残念だが、とうとう鹿は見られなかった。向うの小瀬^{こせ}あたりでも、一昔前までは、よく鹿の啼きごえが聞えたそうだ。

学生 僕はこの間、チェホフの「学生」という短篇をよみました。復活祭で帰省していた一人の学生が、ある日——北風の吹いている、寒い日でしたが、なんだかこの世にはいつの時代にもこんな風が吹きまくっていて、

そこには無智と悲惨としか見られないような考えを抱いて、非常にうち沈んだ気もちになって、散歩から帰つて来ると、もう暮れがたで、隣り村のある農家の中庭では焚火たきびをしている。みると、それは昔自分の乳母だった寡婦かふと、その不しあわせな娘なので、学生はしばらくその焚火にあたらしてもらっているうち、急に使徒のペテロもちようどこんな風かぜに焚火にあたっていたんだろう、と思出し、それからペテロが鶏の啼くまえに三たびクリストを否いなんだ物語をその二人の女に向つて話しはじめる。女たちは黙って聞いていたが、そのうち急に二人とも泣

き出してしまおう。学生はそこを立ち去りながら、なぜ彼女たちは泣いたのだろうかと考える。別に自分がその話を感動的に話したからではない。それはきつとその話のペテロに起った出来事が、彼女たちにも、また、自分にもいくらか関係しているからなんだろう。とおもうと、そんな昔から今日まで、断絶せずに行っている一つの鎖が見えるような気がしている。自分がその一方の端に触れたので、もう一方の端が揺れたのだ。真理と美とがあるの。大司祭の庭のなかで人びとを導いた、そうしていまもなおそれがわれわれを導いている。そう考えると、学生

には急に自分に青春と幸福の感じが帰ってきて、人生が何か崇高な意味に充ちみちているように思われて来る。——そういった筋の、五六頁ペエツばかりの短篇なのです。しかし、僕はそれを読んで、なんだかその学生としよになって泣きたいほど、感動しました。

主　ふむ、いい短篇だね。僕は読みそこなっていたが、いつかその本を貸してくれたまえ。しかし、君の話だけでも、大体は分かるね。ちよつとそこにある聖書をとつてくれないか。そこところを読んでみよう。ルカ伝だったね。（聖書をひらいて読む）「……やがて鶏鳴きぬ。

主、ふりかへりてペテロに目をとめ給ふ。ここにペテロ、主の「今日にはとり鳴く前に、なんぢ^{みたび}二度われを否^{いな}まん」と言ひ給ひいし御言を憶^{おも}ひだし、外に出でて甚^{いた}く泣けり。」——鶏が鳴くと、遠くからイエスが焚^{たきび}火にあたっているペテロの方をふりむいて見る、するとペテロは急にイエスに言われた言葉を思い出し、はっと我に返って、庭の外へ出て行って、暗がりのなかではげしく泣き出すのだね。チエホフの短篇の話をきいて、こここのところを読むと、なんだかこう一層、そのときのペテロの慟^{どうこく}哭が身ぢかに感ぜられて来るようだな。

学生　僕はこの短篇を読んだときにも思ったのですけれど、このペテロの話にしろ、いつかお書きになっただたエマオの旅びとの話にしろ、そんな縁遠いような物語がおもいがけず僕らの身ぢかに迫って来て、妙に感動させられることがあるのですが、それに反して日本の古い物語はいかに美しく、なつかしいと思っても、それだけの強い力がないような気がするのです。何か *fatal* なものの前にわれわれを無気力にさせてしまいます。そのチエホフの短篇は、まず、森のなかのもの寂しい自然の描写ではじまっています。チエホフの筆だとそこが非常に

美しいんですが、そういうもの寂しい自然がすっかりその学生の心をめいらせているのです。——そんなものからチエホフは小説を書きはじめていますが、日本のいいものはそれとは反対に、一番最後にそういうところへわれわれを引きずり込んでゆくように思われるんですけれど……。

主　確かにそういうところがあるだろう。これから君たちは大いにそういうfatalなもの^{あきら}と戦ってみるのだね。僕なんぞも僕なりには戦ってきたつもりだ。だんだんそういうfatalなものに一種の詮^{あきら}めにちかいかい気もちも持ち

出しているにはいるが。しかし、まだまだ腕もがけるだけ腕もがいてみるよ。……（ぱあっと夕日があたって来だしたのを見て、窓をあける。）毎日、こうして雪のなかの落日を眺めるのが愉しみだ。なんだか一日じゅう、冬の日ざしが明るすぎて、室内にいても雪の反射でまぶしくって本も読めずに、ぼやぼやしながらその日も終わろうとする、——そんな空うつつろな気もちでいるときでも、この雪の野を赤あかと赫かがやかせながら山のかなたに落ちてゆうこうとしていく日を眺めると、急に身も心もしまるような気がするのだ。君はいま、こういう落日をみながら、ど

んな文学的感情を喚び起すかね？

学生　そうですね。僕には、いま、二つのものが浮びます。一つは釈迦空の「死者の書」を莊嚴そうごんにいろどっていたあの落日の美しさです。それからもう一つは、フランス・トムスンが「落日頌しやう」(*Ode to the setting sun*)の中で歌った、あの野なかの十字架のうえを血で染めたように赫やかせながら没してゆく太陽の神々しさです。——向うの山の端に、いま、くるめき入ろうとしているあの太陽は、「死者の書」に描かれてある、ああいった山越しの阿弥陀像あみだぞうめいても感ぜられ、それにもしい

んとするような美しさを感じますが、それは何んといつても、やはり僕は、この雪の野のなかに、太陽の最後の光をあびて血に染まったようになって悲痛に立っている一本の十字架を求めたいような気がします。

主 釈迢空と、フランシス・トムスンか。なかなか重厚な好みだな。……僕はきのうね、こんな落日を眺めながら、ふいと飛驒ひだの山のなかのある落日をおもい浮かべていた。もちろん、想像裡のものだがね。——「鷺わしの巢の楠の枯枝に日は入りぬ」どうだ、凄い image だろう。凡兆ほんちょうの句だよ。「越こしより飛驒へ行くとして籠かごの渡りのあ

やふきところどころ道もなき山路にさまよひて」という前書がある。そんな山のなかで、鷲の巣らしいものがかかっている、大きな楠の枯れ枯れになった枝を透いて日が真赤になってくるめき入る光景だろう。鷲の巣は見たことがない、しかし、楠の老木はかつて見たことがある。

上じょうしん信国境にある牧場のまんなかにも、その大木がぽつんと一本だけ立っていた。その孤独な姿がいかに印象的だった。そういう記憶があるせいかな、この凡兆の句にある楠も、僕には、そんな山のなかに他の木こむらからも離れて、ぽつんと一本だけ立っている老木のような気がす

る。

学生（目をつぶりながら）「鷺の巢の楠の枯枝に日は入りぬ」——凄いなあ。

主　そんな句がみごとに浮ぶこともある。かとおもうと、ずいぶんくだらないことを思い出して、いつまでもひとりで感傷的な気分になっていることもある。ある日などは、昔、村の雑貨店で買った十銭の雑記帳の表紙の絵をおもい浮べていた。雪のなかに半ば埋もれて夕日を浴びている一軒の山小屋と、その向うの夕焼けのした森と、それからわが家に帰ってゆく主人と犬と、——まあ、

そういつた絵はがきじみた紋切型の絵だ。ある日、その雑記帳を買ってきて、僕がなんということもなくその表紙の絵をスイスあたりの冬景色だろうくらいにおもって見ていたら、宿の主人がそばから見て、それは軽井沢の絵ですね、とすこしも疑わずに言うので、しまいには僕まで、これはひよつとしたら軽井沢のどこかに、冬になつて、すっかり雪に埋まってしまうと、これとそっくりな風景がひとりでに出来あがるのかもしれない、と思ひ出したものだ。そうしたら急に、こんな絵はがきのような山小屋で、一冬、犬でも飼うて、暮らしたくなつた。

その夢はそれからやつと二三年立って実現された。

——その冬は、おもいがけず悲しい思い出になったが、それはともかくも、あの頃の——立原などもまだ生きていて一しよに遊んでいた頃の僕たちときたら、まだ若々しく、そんな他愛のない夢にも自分の一生を賭けるようなことまでしかねなかった。まあ、そういう時代のかたみのようなものだが、——その十銭の雑記帳の表紙の絵を、僕はこういう落日を前にして、しみじみと思ひ浮べているようなこともあるしね。……だが、きようは、君のおかげで、枯木林のなかの落日の光景がうかぶ。雪の

面おもてには木々の影がいくすじとなく異様に長ながと横わ
っている。それがこころもち紫がかった。どこかで
頬ほお白しろがかすかに啼なきながら枝移りしている。聞えるもの
はたったそれだけ。(そのまま目をつぶる。)そのあた
りには兎うやら雉き子じやらのみだれた足跡がついている。そ
うしてそんな中に雑まじって、一すじだけ、誰かの足跡が幽かす
かについている。それは僕自身のだか、立原のだか……。
学生 急に寒くなってきましたね。もう窓をしめまし
ようか。

日本文学電子図書館

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行



日本文学電子図書館